弘前大学教職大学院
News Letter
4つの力
第 26 号 2025.10.10

NITSセンターから届けたいこと

教職大学院プロジェクト統括 教授 三戸 延聖

弘前大学は令和６年度にＮＩＴＳ弘前大学センター（以下ＮＩＴＳセンターという）として教職員支援機構から採択を受けました。全国に 11 校あるＮＩＴＳ地域センターのうち東北・北海道では唯一の存在です。

青森県は国立大学と県庁が離れた都市に存在している環境にあることは、私たち青森県民にとっては当たり前の状況ですが、全国では唯一の稀有な存在です。

ご存じのとおり現在、本県には青森市と八戸市の２つの中核市があり、現在、義務教育の教員研修はそれぞれ両市の教育委員会によって独自に行われています。

私は県総合学校教育センターに務めておりましたが、当時一つの心配が教員同士のネットワークの構成の薄さでした。特に法定研修を受講する若い世代の教員のつながりが地域限定的であり、今後ますます児童・生徒が減少していく場合、ネットワークの希薄化、散在化は避けられないのではないかという危惧でした。

そこで、地方自治による行政区分の管轄外の存在としての大学を基盤とするＮＩＴＳセンターが各エリアの先生方をつなぐネットワークのハブになり得るのではないかと考えました。ＮＩＴＳセンターのセミナーはエリアに超えて校種を混合して実施しております。さらに弘前大学附属学校の教員も加わります。セミナーを実施していつも感じることがあります。それは次世代の課題が比較的早く顕在化する傾向があるということです。一つエピソードを紹介します。

ＮＩＴＳセンターが実施するセミナーの一つとして充実期研修講座があります。通常オンラインを主として行われます。先日、前年度に参加した教員が試みたアクションプラン（自主研修企画）を共有するプログラムがありました。

それは、Ａ特別支援学校（肢体不自由）とＢ高校（全日制）で行われた体験授業です。このアクションプランを充実期研修で考案したＩ先生の報告です。Ｂ高校ではインクルーシブな環境で授業を行い、授業スピードや情報量の軽減ではなく普段の授業の中で分け隔てのない学習を体験するというスタイルをお願いしたそうです。朝、ジャンボタクシーの中、緊張で無言の状態だった生徒たちが、授業を終えた帰りのタクシーで中では嬉々として授業での出来事を語り、特にＣ君の「授業のスピードと情報量の多さに驚いた。社会に出て対等に働くために、僕はもっともっと勉強しなくては」と語っていたことが印象的だったそうです。Ｃ君はその後、進路のことを親子で話し合い、寝食を忘れるほど猛勉強を開始。やはり、若者は若者によって刺激を受けるものです。単なる学力の面のみならず学校という中で過ごした体験が互いに成長につながった自主企画と言えます。

特別支援教育では、個別な学習が主流ですが課題としてあげられているのは、周りがやってくれることに慣れてしまうこと。指導者と学習者が意図せずに失敗しない環境ができてしまうことに問題意識を持ったことがこの企画の動機だそうです。言い換えれば、個別最適が真に学習者にとって最適か、という問いが投げかけられているとも言えます。

ＮＩＴＳセンターはこのように現場で起こる様々な事象について課題を共有し、教員間のネットワークによって本県全体の教員の意識が高まっていくことを目標としております。充実期研修は次年度以降、中堅研後期代替講座として見込まれております。15 日の６日分（うち校内研修５日間の４日分）を代替するものです。

私は、往復 100 キロの道のりを毎日車で通勤しております。実は逆にこの距離感が大切なのでないかと思うようになりました。連携には実質的な距離や時間的要素はもちろん大事ですが、もっとも重要なことは近づこうとする意識であり、必要性を見出し、互いに編み出すことに真の価値があるのではないか。そのために考える時間がこの道のりにはあります。

今後ともＮＩＴＳセンターをよろしくお願いします。

修了生の想い

ＮＩＴＳ弘前大学センター指導主事研修会で

教職大学院での学びが仕事に活きる

西北教育事務所　指導主事　村井　千絵美さん（2024 年度修了）

教職大学院では、昨今の教育情勢や理念を広く深く学ぶことができました。教育課程、生徒指導、インクルーシブ教育システムの構築等、あらゆる講義から学校課題に立ち向かう視座を得ました。それらは言うまでもなく、指導主事にとって必要な知識でもありましたし、講義以外にも例えば、メールのマナーや、限られた時間で話す意識づくり等も、自分にとっての必要な学びとなりました。

今年度は職務上、授業を参観する機会が増えましたが、授業の見方ががらりと変わったことも学んだことの一つです。つまり、教師の教え方を見るのではなく、こどもの変容を見取るようになったということです。大学院の実習において、児童生徒の様子や表情、発言に目を向け、それを基に、課題や提案事項を授業者に伝える実践を積んだことは、非常に大きな経験でした。今後も、授業者が求める「こどもの学びの変容」を見取れるように、授業を見る目を鍛えていきたいと思っています。

また、特別支援教育の視点に立ち、誰一人取り残されない学びについて考えたことも大きな財産となりました。それは自分自身の実践研究テーマにもつながるものです。学校を訪問すると、多くの先生方が、授業のユニバーサルデザインを実践し、こどもが授業に参加する土台づくりを行っているのを目にします。私自身も試行錯誤して実践した経緯があり、先生方あるいは児童生徒たちに寄り添った支援ができる部分と自負しています。

このように、教職大学院での学びが確実に糧となっており、後押しされる気持ちにもなります。これからも大学院とのつながりを大事にしながら、変化の激しい時代に柔軟に対応できるように、他に学ぶ気持ちを持ち合わせ、アンテナを高く張りながら邁進していく所存です。

『無謬性（むびゅうせい）』の打破に向けた、ミドルリーダーとしての役目

青森市立甲田中学校　教諭　安達　大樹さん（2024 年度修了）

私は昨年度まで、教職大学院において不登校の予防に向けた実践研究に取り組み、今年度も実践研究を継続しつつ、他の様々な学校課題の解決に向けた校内研修に取り組んでいます。学校が抱える課題は多様にありますが、実践に取り組んでいく中で、それらの解決には学校が抱える『無謬性（むびゅうせい）』の意識を打破することが重要であることを実感しました。

「無謬」とは「あやまりがない」という意味で、これまで学校では、「誤りが許されない」という意識ゆえに、本質的な課題が見出せていても、失敗や批判を恐れて慣習や学校文化の抜本的な改善に取り組むことに抵抗が見られることがありました。そこで、私がその無謬性の打破に向けてミドルリーダーとして取り組んできたことは、「とにかくやってみよう」という意識を広げていくことでした。

まず、校長と相談し、学校課題から５つのプロジェクトチームを掲げました。最初に、私がファシリテーターとしてアジャイル型開発と無謬性についての説明をし、そこから話し合いを始めました。学校や生徒の実情について話しているうちに、徐々に話が盛り上がっていき、そこから、「とにかくやってみよう」という意識が芽生え、新しい活動に取り組んでみたり、結果を互いのチームで交流しあったり、中にはプロジェクト活動が全校での取組になっていったりと、学校内の大きな変革につながっていったことを実感しています。

私が教職大学院で身につけたスキルは、私一人の成長のためだけでなく、先生方が自信を持ってチャレンジできる場作りに貢献できたのではないかと感じています。これからも、「とにかくやってみよう」の精神で、令和の学校作りに取り組んでいきます。

校内教育支援センター「らしっく」

院生が語る　教職大学院の授業

※2024 年度後期授業を紹介しています。（写真は学生生活の別のひとこまです。）

「協働的生徒指導のマネジメント」

生徒指導提要において重要視されている「リアクティブ」（問題が起こってから対処する消極的）な生徒指導から「プロアクティブ」（生徒の成長を支援し、課題を未然に防ぐための積極的）な生徒指導への転換を現実化するために、学校内・外の各種資源との連携をコーディネートするための方法について考える授業です。ディスカッション中心の授業であり、「学校」の「児童・生徒」を「教育する」という教員の固定的な考えを広げ、「家庭・地域」の「こどもたち」を「共育する（校種を超えた教員同士と地域の方々と共に育む）」ために、何ができるのかを考えることができました。現実の多忙さの中では即時的な特効薬を求めてしまいがちですが、対話し協働し続けることで、豊かな教育＝共育のためにできることを考えられるのではないでしょうか。生徒指導のマネジメントについて、様々な視点、視座から考えることができました。（ミドルリーダー養成コース２年　三戸　大志）

「学校教育と教育行政」

授業は、時代の変遷と教育行財政の役割を理解し、学校経営改革における教育行政の視座を事例分析から考察し、今後の教育行政のあり方を展望するものでした。

この授業は、教員と院生が円になって語り合う形式が特徴的です。教育行政の課題や現場から見えにくい難しさ、フリースクールや夜間中学の設置、慣習を打破する創造性といった多岐にわたる議題について、教育行政の現場で活躍された先生の経験や助言を交え、和やかながらも緊張感のある濃密な議論が交わされ、学びを深めることができました。（ミドルリーダー養成コース２年　横濵和也）

「教育法規の理論と実践」

教職員に必要な教育法規を知り、学校教育活動の場面でリーガルマインドを持って対処するために必要なものの見方を学ぶことができました。ゲストスピーカーの弁護士の方からは実際の事例や判例で学校の法的な対応について学ぶとともに、道義的責任についても学ぶ場面がありました。また、いじめやトラブルだけでなく、こどもたちの学びの機会を守ることや、こどもと大人の人権を守ることについても、教育法規とともに、マルトリートメントやデモクラティックスクール等の幅広い話題を含め、毎回先生方と院生とのグループ協議を通して考察を深めることができたと考えます。そしてこの学びは現在学校での自分の行動指針に非常に影響を与えた学びであったと思います。（ミドルリーダー養成コース２年　長嶺　海）

「教職員の職能成長」

この授業では、教員の職能成長に関する基本的原理を理解し、学校組織やその中でのコミュニケーションの在り方などを検討するとともに、自らの成長段階や課題を考察しました。とりわけ、教職ライフラインの作成・発表は私にとって大きな学びとなりました。自身の経験を振り返ることで、教育観の形成過程や成長の軌跡を見つめ直し、今後の課題をより具体的に捉えることができました。また、他の院生の発表を聞くことで、多様な教育観や成長のプロセスに触れることができ、視野を広げる貴重な機会となりました。こうした省察と共有を通じて、教員の成長には深い自己理解や他者理解、そして互いに学び合う姿勢が欠かせないことを改めて実感しました。（ミドルリーダー養成コース２年　細田瑛介）

私の研究―中間報告会に向けて―

※中間報告会では、2 年次院生が現在進めている研究について発表を行います。
※ミドルリーダー養成コースの院生については所属校を記載しています。

小学校特別支援学級におけるポジティブ行動支援の取組を通した，児童の行動と意識の変容に関する実践的研究
浅利　美穂（青森市立浪館小学校）

こどもたちと向き合い「できている行動」を認め、ほめることで、こどもと教師が笑顔で安心して学校生活を送れるようにするために、関わり方や環境づくりを日々試行錯誤しています。まだまだ、「できていない行動」ばかりに注目してしまい、研究の原点を見失いそうになることもあります。しかし、本校の先生方や大学院の先生方に支えていただきながら、こどもたちの見せてくれる小さな変化や成長を励みに、より一層研究を深め、実践研究の成果と課題を報告いたします。

学校・家庭・地域が一体となってこどもの育ちを見守る体制づくり―こどもにとって安心安全な居場所となる学校づくりの取り組み―
遠藤　彩華（八戸市立城北小学校）

勤務校に戻り半年が過ぎましたが、先生方、保護者、地域の皆様に支えて頂きながら実践研究を進めております。現在、コミュニティスクール推進担当として先生方や地域の声を聞きながら、今まで取り組んできた教育活動をさらによりよいものにしていこうと日々模索しています。中間報告会では、日々の取り組みから得た成果と実践を通して見えてきた課題について整理し、こどもたちのために実践研究を充実させていきたいと思います。

研究テーマ：生徒の経験の違いを活用した授業づくりにおける教師の「見取る力」の向上を図るための研修
高坂　洋輔（青森県立青森第二高等養護学校）

実践と校内研修を進めています。実践では、「異年齢」に着目し、学年を超えた学び合いを進めていますが、日程や他学年との調整で、多くの先生のお力を借りながら進めています。また、校内研修では、生徒の学びの姿を複数で語り合う研修会や、異年齢活動を実現するためのワークショップ等を行いました。異年齢活動を自ら実践してくださる先生もおり、中間報告会では、私の実践だけでなく校内の実践も含めて報告できればと思います。

中学校外国語科における個別最適な学びを実現する授業設計の検討―方法を飼いならし，教科する授業づくりに向けた AI（愛）のある実践を通して―
三戸　大志（田舎館村立田舎館中学校）

中央教育審議会(2021)「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」の答申により周知された「個別最適な学び」をどう実現するのか、その際、今現在、試行錯誤されている「AI」はどのように活用できるのか、という問題意識を持っています。何を成果・課題と捉えるのかという枠組みすら問う必要があるため、本校の先生方の授業に対する意見がとても重要であり、お忙しい中のご協力に感謝しかありません。中間報告会では、これまでの進捗状況についてお伝えしたいと考えております。

学びの価値を実感する生徒を育む授業の在り方―高等学校における国語科と総合的な探究の時間の実践から―
長嶺　海（青森県立青森西高等学校）

生徒が「学びの価値」をより実感できる授業の在り方を探り、試行錯誤しながら早くも半年が過ぎました。教科でも総合でも、学ぶことは進路達成の手段として重要だと捉える一方で、学ぶことへの前向きな気持ちは必ずしも一致していない例もあり、この阻害要因をまずは生徒の声から探り、授業に反映できないかと考えています。実践に際しまして勤務校の先生方、生徒、教職大学院

の先生方等多くの方々の御協力に心から感謝しております。中間報告会ではこれまでの実践を整理し、進捗を報告させていただきたいと考えています。

定時制高校における自己の課題と向き合う「総合的な探究の時間」 ―「対話」と「意識化」に着目して―
細田　瑛介（青森県立五所川原高等学校）

私は、生徒が地域社会の課題でもある自己の困難と向き合い、それを乗り越えていくための「総合的な探究の時間」のあり方について研究しています。これまで、「ひとり親家庭」「依存症」「農業の後継者問題」を例に、ゲストティーチャーによる講義やフィールドワークを行い、その後、先生方と協力して個別面談を実施し、生徒のテーマ設定を支援してきました。これからは生徒個々の探究活動が中心となります。私はその活動を支援しつつ、得られたデータを分析し、研究成果として報告したいと考えています。

心理的安全性を高めるための学級集団づくり
山内　千秋（鶴田町立鶴田小学校）

私は現在、小学校６年生 30 名を対象に、学級全員で輪になって話す活動を通して、安心して発言できる関係づくりに取り組んでいます。実践を重ねる中で、自分の思いを聞いてもらえる心地よさや他者理解の深まりが見られ、学級の変容を実感しています。次期学習指導要領では、「心理的安全性」という文言が初めて明確に示され、全ての活動の基盤としての重要性が示されました。中間報告会では、これまでの成果と課題を整理し、安心して協働できる学級集団づくりへの展望を示したいと考えています。

「自律的・継続的な校内研究のあり方について～実践の省察と共有を通じた教師の学びの創出～」
横濱　和也（六ケ所村立千歳平小学校）

校内研究仮説をなくすという新たな研究方法や、それに伴う指導案・検討会のモデルチェンジ

への挑戦を、先生方の温かいご支援のもと、着実に進めることができています。

この取り組みは、教員一人ひとりの個別最適で協働的な学びを促し、自律的で継続的な校内研究の充実に繋げることを目的としています。中間報告会では、これまでの実践の蓄積をより整理された形でご報告できるよう、準備を進めてまいります。

現実社会の中で知識と実践が融合する当事者意識を育てるために～高等学校商業科目に関する一考察～
加藤　広之（学校教育実践コース）

研究とはこれでいいのかと悩む日々です。春先は、目の前の生徒が分かる、楽しいと感じるための授業づくりを考えることが多く、研究を行うことができるか不安でいっぱいでした。しかし、実習先の指導教員の先生方などの支援や、生徒の元気や笑顔からパワーをもらい、今日まで研究を進めることができました。

中間報告会では、これまでの活動をまとめ、最終報告会に向けて、最後は、目の前の生徒に還元できるような時間にしたいと考えています。

生徒との応答を踏まえた授業改善―ふりかえりシートや逐語録を手がかりにして―
熊谷　翼（学校教育実践コース）

授業づくりや実践に対して苦しさを感じることがありました。授業の出来を自ら否定的に振り返るうちに、楽しさや自信を見失っていたからです。転機の一つが、生徒の反応や要望を積極的に聞くことでした。「クレームは宝の山」という経営学での考え方があります。生徒の生の声に真摯に向き合い、その変容を示すことが、授業改善、更には信頼関係を築く土台になると感じています。我以外皆我師、生徒も自身も興味深いと感じ、共に創る授業づくりに向けて研究に励みます。

算数科における自己効力感を高めるあり方の一考察
佐藤　希泉（学校教育実践コース）

児童が算数科の授業で新しい問題に出会ったとき、「自分ならできそう」という自己への期待感を高められるようにしたいと思い、研究を進めております。その際、児童自身が目標を設定し、見通しをもつことが重要であると考え、９月までの実習では児童が自分と向き合う時間を複数回設定いたしました。振り返りシートや児童の動き、発言から実践の有効性を分析し、引き続き授業改善に努めてまいります。

高等学校における主体的に探究する姿勢を育成する地理教育－振り返り場面における生徒の「問い」に着目した授業実践－
佐藤　恒太（学校教育実践コース）

私は研究テーマとして「高等学校における主体的に探究する姿勢の育成」を掲げ、実習において多様な授業実践に取り組んでいます。特に振り返りの場面では、生徒が単元全体に対して自ら「問い」を立てる活動を重視しています。この活動を通じて、生徒は学習内容を単なる知識として終えるのではなく、そこから新たな課題や疑問を見出すことができます。その結果として「もっと知りたい」「自ら調べてみたい」という探究心が喚起され、主体的に学びへと向かう態度が育成されると考えています。

小学校社会科における主体的な学習者を育成する授業検討－自己調整学習の視点を取り入れた授業づくり―
佐藤　譲（学校教育実践コース）

私は、小学校社会科において、自己調整学習の視点を取り入れた授業実践を行っております。児童が主体的に学習を展開できるよう、単元ごとに学習計画の立案、計画に基づく実行、振り返りという学習サイクルを取り入れ、実践しました。中間報告会では、この実践を通じて児童に生じた学習態度や認知面での変容、さらに指導上の課題として明らかになった点についてご報告する予定です。

一人一人が意欲と向上心をもち参加できる歌唱指導のありかた
八木橋　奈緒（学校教育実践コース）

私は、「技術の向上が意欲や向上心の高まりにつながる」という仮説のもと、これまでに発声・聴取・表現の工夫を取り入れた授業を行ってきました。今年度は特に、児童の向上心を高めるためのアプローチとして、児童同士の関係性や変声期への配慮を踏まえた座席配置を工夫し、心理的安全性の確保に努めました。中間報告会に向けて、これまでの学びを生かしながら理論を整理し、後期からの授業実践に向けて取り組んでいきたいと考えています。

音楽の療法的効果を用いた教育的アプローチに基づく音楽的支援
山上　昭恩（学校教育実践コース）

本研究は、多様な感情が交錯する学校現場において、音楽の療法的効果を活用し、児童にとって穏やかで、自己と向き合う時間の創出を目的としています。昨年度はピアノ演奏による音楽聴取を行い、本年度は朝の会で「ハートタイム」と称し、クラシック音源による音楽聴取に加え、ビデオ分析やフェイススケールを用いた児童の見取りを取り入れた実践を行っています。研究に取り組めるすべての環境に感謝し、今後も理論的裏付けを深めながら、児童の実態に即した研究を進めてまいります。

中学校理科における学習意欲を高める方策の検討―価値と期待に着目して―
山谷　峻右（学校教育実践コース）

現在、私は中学校理科における授業実践を通して、生徒の学習意欲を高める方法について検討しています。生徒が理科学習の価値を認識できるよ

うにするため、学習内容が社会や生活においてどのように活用されているのかを明示することを重視しています。また、生徒の自己効力感を高める手立てとして、ＯＰＰシートを用いて自己の変容を振り返らせる活動や、授業中に生じた疑問を自ら調べて発表させる活動を実施しました。前期の実習で見られた生徒の変容を踏まえ、今後の授業実践にさらに生かしていきたいと考えています。

中学校数学科における、全ての生徒の「参加」・「理解」・「習得・活用」を目指した授業づくり －自力解決と振り返りを重視して－
久保　光彰（教科領域実践コース）

私の研究では、全ての生徒が「次につながる理解」である「習得・活用」の段階まで到達できる中学校数学科の授業づくりを目指しています。そのために、まず、日常生活との関連を重視して題材を選んでいます。また、授業の最後に、生徒が本時の活動を振り返り、大切だと思った考え方やポイント、これから活かしたいこと・気を付けたいことを書く時間を取っています。

中間報告会では、生徒が振り返りに書いた内容を分析し、それをもとに、実践した授業の効果的だった点と改善すべき点を明らかにします。

古典を自分ごととして学ぶことのできる授業のありかた
髙塚　夏海（教科領域実践コース）

本研究では、主体的な言語活動を設け、古典と生徒を結び付けることを目指しています。古典の内容を深く理解した上で、登場人物の行動に対して「自分だったらどうするか」と置き換えて考えたり、自身の経験と重ね合わせたりする場面を授業に設けます。さらに、古典から得た学びを川柳や本の帯などの創作物として表現することで、個人の学びにとどまらない協働的な学習を促します。今後も研究の成果を実習校の皆さんに還元できるように努めていきます。

自立した学習者を目指した授業づくり－自己調整学習の観点から－
前田　凌玖（教科領域実践コース）

私は自己調整学習の視点から、自立した学習者の育成を目指した研究に取り組んでいます。今年度は、生徒が学習課題に主体的に取り組み、自ら目標を設定し、実行と自己内省を繰り返すことで学びを深められるよう工夫してきました。また、話し合いを通して互いの学びを共有し、再度学習目標の達成に向かって努力する機会も大切にしてきました。中間報告会では、これまでの実践で得られた成果と課題を整理し、発表いたします。

協同学習における自己効力感の変容
三上　紘輝（教科領域実践コース）

２年前期の実習では尺度の作成に取り組み、生徒からボトムアップして得られた尺度を協同学習における変容を捉える視点として活用したいと考えています。授業では振り返りシートを紹介し、生徒を褒めながら活動を進めることで互いの良さに気づきやすい雰囲気づくりを行いました。今後は振り返りシート、録音記録、尺度を用い、生徒の自己評価と教師の観察を照合しつつ変容を多面的に見取っていきます。

２年次院生の研究中間報告会を開催します

ミドルリーダー養成コースの院生は、組織を活かして学校課題解決に取り組める教師を目指して、また、ストレートマスター院生は、教科・領域の指導を通してこどもたちの資質・能力を高める教師を目指して、研究に励んでいます。皆様のご参加を心よりお待ちしています。

【日　時】　令和７年 11 月１日（土）８：40～15:40　〔受付〕８：20～８：35

【会　場】　弘前大学教育学部＆Zoom によるオンライン会場

【申込期間】　９月 29 日（金）～10 月 24 日（金）

※日程・会場・申込方法等、詳細については、教職大学院ホームページをご覧ください。

「幸せって何色？」―院生が JICA 研修生との交流会を企画―

JICA 交流会をミドル院生で企画・運営したことで、多くの充実した学びが得られました。JICA 研修生の方々の、各国の事情や背景に配慮した交流会にしようと方針が定まってからは、準備にも一層拍車がかかりました。不慣れな分野にも果敢に挑み、適切に分担し協働できる、同僚性に満ちた院生仲間には本当に感謝しています。

当日は、ジャンケンを協力型のペアアクティビティにアレンジした「ジャンケン 5」で和やかな雰囲気からスタートしました。日本の教員養成の仕組みや弘前大学の教職大学院での学び、なぜミドル院生が大学院への進学を決めたのかなどを、スライドを用いながら英語で発表しました。普段英語を使う機会がない院生にとって、各自の発表や運営にかかるプレッシャーは相当なものだったと思います。それにもかかわらず、後ろ向きな言葉は一度も出ず、それぞれが自身の役割に明るく積極的に取り組む姿がとても誇らしかったです。研修生の方が、発表者の英語の発音をすかさず補助した場面では、優しさと可笑しさで会場が温かい笑いに包まれました。

交流会の最後には、私がファシリテーターを務め、「P4C -Philosophy For Children-」を実施しました。大学院の学びの中で、P4C が「参加者それぞれがフェアな立場で、温かい雰囲気の中で発言し合える」対話型アクティビティとして有効であることを学んでおり、今回の交流会に最適だと考えたからです。国籍の違う私たちが「フェア」に話せる話題として、「色」がふさわしいという仲間の意見をヒントに、P4C の問いを決めました。前半は「What color do you like?（あなたは何色が好き？）」で、シンプルな対話から交流を深め、P4C のルールや流れを確認しました。後半は「What color is happiness?（幸せって何色？）」をテーマにしました。単に好きな色ではなく、幸せを象徴する色について語り合うことで、その人や国の背景にある価値観に迫ることができると考えたからです。

研修生の方々は、私の問いの意図を深く汲んでくれました。『青。青は海の色。すべての命は海から生まれたから。』『緑。緑は私たちの周りに生い茂っている。私の国のフラッグにも使われているしね。』など、興味深い意見が次々に生まれ、拍手とともに次の人に繋がれていきました。なぜその色が幸せを象徴するのかという、一人ひとりの考え方がとても興味深かったことに加え、『彼が言っていたように…』と他者の発言を踏まえて対話を繋げてくれる人、コミュニティーボールを面白可笑しく投げて場を盛り上げてくれる人などがいて、とても充実した楽しい時間となりました。

「次の人で最後にしましょう」と私が声をかけたとき、ボールを持った人が、元からそうするつもりだったかのように、一人の研修生に優しくボールをパスしました。最後の発表者となったのは、今回、紛争地域から来日し、教育の未来をテーマに掲げていた方でした。実は、私が P4C の問いを決める際に最も意識した研修生がこの方でした。彼は「白です。白が幸せを象徴していると感じます。世界が平和であることを望みます。」と語ってくれました。会場にいた全員が大きく頷き、温かい拍手を送りました。

言語や価値観に違いがあったとしても、平和を願う心、気遣いの心、人を楽しませようとする心に境目はないのだということを、この P4C を通して感じることができました。

私たちミドル院生が企画・運営した今回の交流会が、JICA 研修生の皆様にとって、何かしらの良い刺激となり、それぞれの今後に繋がれば幸いです。私自身は、英語力の向上に加えて、もっと視野を広く持ち、多くのことを学びたいと強く思いました。改めて、ご指導・ご支援くださった先生方、当日のサポートをしてくれたストマス院生の皆さん、そして共に企画・運営をやり遂げたミドル院生の仲間に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

ミドルリーダー養成コース１年　葛西健介
（深浦町立深浦中学校）

<編集・発行>
弘前大学 大学院教育学研究科教職実践専攻
（教職大学院）
〒036-8560 青森県弘前市文京町１番地
Tel 0172-36-2111（代表）
メールアドレス k-daigaku01@hirosaki-u.ac.jp